

博物館だより

第65号

2006.3.31

Nagano City Museum



春を呼ぶセイゾーボー行事



▲ ワラ人形づくり



▲ 完成した人形を前にみんなでお数珠回しをする



▲ ワラ人形を集落入り口まで持っていく



▲ 集落入り口にある庚申塔にワラ人形を立てる

昨年長野市に合併した大岡地区では、春のお彼岸に藁で人形を作り、集落の境に立てる「セイゾーボー」あるいは「デイドーボー」と呼ばれる厄除けの行事が、いくつかの集落でおこなわれています。博物館ではこの春、博物館講座「石仏探険隊」の参加者と一緒に、大岡地区上中山集落のセイゾーボーの行事を見学しました。

上中山では春のお彼岸中日の3月21日の午前10

時に地元の方が集落のセンターに集まり、男女2体のわら人形を作ります。高さ2mの人形を作り上げると、人形を前にみんなでお数珠回しをして、そのあと人形を先頭に鉦をはたきながら、集落の入り口にある庚申塔のところまで行き、人形を置きます。集落の入り口に立てられた人形は、これから一年間、集落の安全を守り続けることになります。

大岡地区の厄除け行事 ～セイゾーボーの行事について～

大岡地区を中心とした地域では、3月春彼岸の中日にセイゾーボー（あるいはデイドーボー）と呼ばれる行事を行うところがいくつか見られます。

◆行事の分布域

集落によってセイゾーボーとかデイドーボーなどと呼ばれる行事は、大岡地区とその北隣に位置する信更町軽井沢集落の限られた地域で見られます。このように狭い地域で行われている行事であるにもかかわらず、行事の内容は大きなところでは一致するものの、細かなところでは集落ごとに異なりを見せています。以下では、実施している集落に共通する、行事のおおまかな内容を示したあと、集落間の差異について見ていきたいと思えます。



◆行事の内容と性格

セイゾーボーの行事は、いずれの集落でも3月春彼岸の中日に行われます。この日、集落の人々が集まり、藁で人形を作って、それを集落境まで持っていき、境に立てると行事は終了です。境に立てられた人形はそのまま一年間放置されます。行事を行う時期がお彼岸ということもあり、このときにお数珠回しを行うところも多くみられます。かつては子どもの行事として、子どもが主体となって行事を行っていましたが、過疎化、少子化が進んだ現在では、大人主体の行事となっています。

なぜこのような行事を行うのかという理由については、お腹の病を人形に託して、集落から追出す行事であるとか、外からの災厄を人形が防いでくれる行事であるといった説明が地元ではなさ

れており、厄除けとしてセイゾーボーの行事が行われていることがわかります。

◆地域ごとの差異

おおまかなところでは以上のような内容で一致するセイゾーボーの行事ですが、作られる人形・人形の処理の仕方・行事の名称に集落間で異なる点が見られます。

人形を集落の戸数分作るところや、行事に参加する役員の数だけ作るところ、また立っている人形だけでなく、馬に乗っている武者などを作るところも見られます。上中山集落では2体の人形を作り、「へのへのもへじ」顔を男とし、鏡文字の「へのへのもへじ」顔を女としますが、かつては男には股間に男根として大根（あるいはごぼう）を、女には女陰としてにんじんを股間に取り付け、男女の性を強調したものを作っていたといえます。

人形の処理の仕方を見ると、ほとんどの集落で集落境に立て、一年間放置するのに対し、軽井沢集落だけは人形を集落境に捨て、処分します。

行事の名称も分布の北から、セイドーボー・セイゾーボー・セイズイボー・デイドーボーと変化して伝えられています。

◆地域ごとの差異は何を意味するのか？

集落間の差異には、他の民俗事象の影響を思わせるものがいくつか見られます。例えば、上中山の性差を強調する男女一対の人形には道祖神信仰の影響がみられますし、軽井沢集落で作る馬に乗る武者とお供の侍の人形は、西日本に見られる虫送り行事の際に作られる実盛さんさねもりと呼ばれる人形に酷似しています。また人形に対する考え方について、人形を一年間村境に立てて置くという行為は人形を外界からの災厄を防いでくれるものと捉えていることを示していますが、逆に、人形を捨てるという軽井沢集落の場合では人形に災厄を託して集落内から放逐するという、正反対の考えが見られます。このように見てくると、狭い範囲で行われる同じ行事であっても、行事を毎年毎年行う中で大岡地区に入ってくる新しい文化を集落ごとに取捨選択しながら取り入れた結果、それぞれの集落の個性を反映した形に変化していったと考えられます。（細井雄次郎）

着々と進む戸隠新館整備事業

柵中学校校舎（昭和24年建築）を再利用した戸隠地質化石館は老朽化し、危険な状態です。そこで、3月末に閉校の柵小学校を整備し、茶臼山自然史館も統合して、新しい自然史系博物館として3年後に開館する計画を進めています。

そのための展示資料の収集も、積極的に取り組んでいます。昨年10月、篠ノ井小松原段の原で京都大学が行った活断層発掘調査現場で地層のはぎ取りをしました。トレンチを掘って、弘化四年（1847）の善光寺地震（推定マグニチュード7.4）を引き起こした活断層の特徴や活動周期を調べるための調査です。トレンチ内に活断層がきれいに確認され、お願いして地層のはぎ取りを行わせていただくことにしました。



▲ トレンチ内ではぎ取りの様子と完成した資料

接着剤と繊維で裏打ちして固めた地層を人力で徐々にはぎ取っていくのです。職員だけでは手が足りないので、ボランティアの協力もお願いしました。丸一日かけて、約2畳分の地層をはぎ取ることになりました。長野の大地が大きく変動している証拠を入手することができました。

また、10月末には、裾花川の河床で見つけた約2トンの岩塊も採取しました。絶滅したホタテガ

イがびっしりと詰まった約400万年前のこの石は、長野市が日本海につながる海で、寒流が流れこんでいたことやその後の大地の隆起を物語る証拠となっています。しかも、これまでにない大きさのものです。新館整備に向けての「大地からの贈り物」といった感じです。



▲ 中には化石がびっしり！400万年前の砂岩

また、動物の骨格標本群も新館の目玉です。ツキノワグマやイノシシなどの大型種から、モグラやコウモリなど小型のものまであります。クジラやアザラシなども収集しています。7月23日～9月10日には、これらの資料に加え世界最大のコウガゾウ（黄河象）の骨格など150種以上の動物たちの骨を展示した特別展「骨の動物園」を市立博物館で開催します。ぜひ、いろいろな骨から動物たちの生態やその進化を学んでみましょう。



▲ ボランティアによる動物の標本づくり

こうした収集活動には、ボランティアの陰の活躍が欠かせません。整備される新館は、みんなで自然を解き明かす活動を行い、成長していく活動型の館をめざしています。自然を楽しみながら調べ、博物館をつくる活動に取り組んでみませんか。ぜひ、戸隠地質化石館（TEL.252-2228）まで連絡を！お待ちしております。（田辺智隆）

講座参加者による成果発表会

3月4日（土）にもんぜんぷら座地下ホールで博物館の4講座参加者による初めての成果発表会を開催しました。当日は、講座参加者と一般市民の方を合わせて約60名ほどの参加者がありました。

◆講座の概要

○総合講座「千曲川をあるく」

2002年10月から始まり、現在まで継続している講座です。千曲川と暮らしの有り様を実際に現地を探訪することで身近な生活環境を見つめ直そうということを主眼としています。

○石仏探検隊

2002年6月から始まり、現在まで継続しています。今年度は大岡地区を中心に市民と共に石仏調査、所在地図づくりをおこない、データの集積を目的としています。

○鎮守の森を歩こう

今年度より始まった新しい講座です。鎮守の森の景観が暮らしとの関わりの中でどのように変遷をとげてきたのかを、地元の人からの聞き取りや現地調査を通じて調べていくことを主眼としています。

○講座「川中島合戦を考える」

2002年5月から始まり、現在まで継続しています。「川中島の戦い」は誰でも知っている戦いですが、その実態はよくわかりません。この戦いがなぜ有名になったのか、地元にとってどのような意味があったのかを改めて市民と共に考えることを主眼としています。

◆講座成果発表会の目的

各講座は、地域に密接に関係した内容を素材としています。従って自分の地域に目を向けることは、地域を見直すということであり、引いては地域のことが好きになり、地域の将来にも目を向けるようになると思います。

博物館というのは単独では存在しません。情報の受け手である市民の存在がなければ存在意義はありません。従って博物館が主体ではなく、参加者・利用者が主体となる博物館活動を実践することが両者にとって大きな意味を持ち、博物館自身の成長・発展にもつながると考えています。

今回の発表会は、参加者自身によるこれまで積

み重ねた成果の一端を発表していただきました。この成果は博物館の財産でもあり、参加者自身の財産にもなるものと思います。今回のような場を通じて、地域文化を形にし、それを未来に引き継いでいくことが博物館の役割だと自負しています。

◆発表会を終えて

事前に各講座の参加者によって、発表掲示用の資料（模造紙張り合わせ）を作成し、これを説明解説する形で行いました。今回の発表会の実施に当たっては、当初抵抗感はありましたが、準備段階での盛り上がりや各人が自分の言葉で発表できたことで、達成感が得られたことと思われます。来年はもっと準備をして取りかかりたいとか、調査探訪も発表会を視野に入れて取り組みたいなどという声も聞かれました。第2回目が楽しみになってきます。

◆資料集の作成

発表会は口答でおこないますが、記録や記憶に残すという意味で各講座とも資料集を作成しました。

◆さらに博物館活動の拡大を！

今回の発表会は、講座参加者が大部分で一般市民の方はごく少数でした。こうした講座を行っていること、博物館活動の考え方などを広く市民に知っていただくためにもさらに利用者主体の活動を拡大していきたいと思っています。（山口 明）



▲ 資料集の作成



▲ 発表の様子

地域の資料をその地元で公開する移動博物館事業。今年は2月25、26日の両日、南長池公民館で実施しました。両日合わせて125人と多くの方にご来場いただき、祖先が残した資料を直接手にとって当時の様子を振り返ってみました。

南長池区有文書は2004年に博物館に寄託いただき、目録作りを行い、その完了と成果報告をかねて今回の移動博物館実施となりました。区有文書は2本の役^{やくだんす}筆筒にぎっしり詰められ、代々の区長が引継いできたものです。博物館では資料の序列を崩すことなく、引出しごとに上からまとまり順に目録作りを行い、総点数は967点にのぼりました。

文書の内容としては、区内を東西に流れる用水に関する文書や、古牧村誕生以



▲ 整理前の役筆筒の引き出し

後の行政文書がまとまって残っている印象を受けます。

今回の移動展を通して、地元の方から新たな資料情報を得ることもできました。今後さらに南長池地区の宝が増えることが期待されます。

巷では世界遺産が脚光をあびていますが、南長池区有文書をはじめ、こうした地域に残る資料・宝は、「地域遺産」と呼べるものです。博物館では今後もこうした「地域遺産」を、地元の皆さんといっしょに掘り起こし、光を当てていきたいと考えています。

(降幡浩樹)



▲ 移動博物館の会場の様子

卒園・卒業を控えて プラネタリウムで思い出作り 年度末の幼稚園・保育園投影

今年も園児の声がプラネタリウムいっぱいに響きわたりました。プラネタリウムの幼稚園・保育園投影は6年前から始めましたが、年々プラネタリウムを訪れる園が増えてきています。特に年度末となる12月～3月に幼稚園・保育園投影のピークを迎えます。

投影を始めた当初は園児と園関係者だけが入館していましたが、保護者からも「是非見たい」と

言う要望が出てくるようになり、保護者の入館も徐々に増えてきました。その理由は、当館の園向け投影は笑顔いっぱいの園児の顔が、さらに年度末の時期は年長さんの1年間の思い出の写真が音楽とともにスクリーンに大き



▲ 園からの贈り物

く映し出されるからです。投影時間は約1時間と園児にとってはとても長い時間ですが、終わってみると「もっと見たい」「もう一回見たい」の声がたくさんあがります。投影が終わると、引越しなどでお友達と別れてしまう子や先生の目に涙が見られました。

(大蔵 満)



▲ 投影直前の様子

幼稚園保育園投影入館状況 (H12年～17年度)

	H12	H13	H14	H15	H16	H17
来園数	18	17	29	48	49	58
保護者数	0	15	78	230	368	470
全入館者数	1904	1741	3492	5214	5250	6132



春の里山散歩



雪と寒さの冬が終わり、里山には着々と春が訪れています。先日（3月21日）茶臼山を歩いたら、雪の融けた地面からフキノトウが顔をのぞかせていました。フキノトウは雄と雌があり、黄色い花が咲くのが雄、白いのが雌です。フキノトウがあったら、ぜひ見比べてみてください。木々の芽も膨らみはじめており、今年は3月末にダンコウバイの黄色い花が見られました。また、今年初めて、森の中でクモの巣にひっかかりました。冬の間にはなかったことで、なんとなく春を感じてしまいました。フクロウの結婚と子育ての時期が来たようで、日中でも「ゴロスケホーホー」と盛んに鳴いているのが聞こえ、キツネともぼったり出会いました。また、冬の間は見ることもなかったハクビシンも動きはじめています。

これから初夏にかけては、植物が一斉に芽吹き、花を咲かせ、動物たちも活発に動き出す、とてもにぎやかな季節です。足元にはタンポポ、オオイヌノフグリ、タチツボスミレ、カキドオシ、ホト

ケノザ、木々ではコナラ、ガマズミ、ウリカエデなど、数え切れないくらい多くの種類の植物が観察できます。田んぼでは、アメリカザリガニ、ドジョウ、オタマジャクシ、ホウネンエビが観察でき、耳をすませば森の中からコゲラが木をつつく音やフクロウの鳴き声が聞こえてくるかもしれません。天気の良い日には茶臼山で、春の里山散策を楽しんでみたら、どうでしょうか。（三上光一）



▲ 地面から顔をのぞかせるフキノトウ

ガイドブック「茶臼山の自然」刊行！

市街地の近くにあって公園や遊歩道が整備されている茶臼山は、里山の自然観察には絶好のフィールドです。春は植物観察やバードウォッチング、夏には昆虫採集、秋には木の実ひろいなど、1年を通じてさまざまな自然体験ができます。

そんな茶臼山の自然の魅力を紹介する自然観察のガイドブック、「茶臼山の自然」（A5判カラー・64ページ）が3月末に刊行されました。

ガイドブックの内容は、観察のための案内地図、茶臼山の大地の成り立ちと化石、茶臼山で観察で

きる動植物の紹介などで、茶臼山の自然を総合的にわかりやすく解説しています。動植物の項では、四季折々



▲ シオカラトンボ

に見られる植物、キノコ、哺乳動物、鳥類、チョウやトンボなどの昆虫、水辺の生物たちが合計128種類ほど写真で紹介されているので、茶臼山以外の里山で自然観察をする際にも役立つと思います。

このガイドブックは、茶臼山自然史館と博物館本館で一冊300円で販売しております。このガイドブックを持って茶臼山の自然観察にでかけてみませんか？（畠山幸司）



▲ ガイドブック

◆道標の発見

平成16年11月下旬、篠ノ井塩崎の県道長野上田線（旧国道18号線）に架かる見六橋架け替え工事中に橋より数メートル下流の岡田川南岸の川底より角柱の石が発見され、地元の山田昭雄氏の調査により、善光寺道標と判明しました。県建設事務所では、地元の要望もあり、架橋工事が終わった段階で道標を現地に建立することになりました。この期間を利用して道標のレプリカを制作することにし、平成17年度事業として段取りを組み、ようやく平成18年3月半ばに完成、常設展示に設置となりました。

◆道標の概要

この道標は、高さ1760mm、幅470mm、奥行き250mmを計り、上面の角を丸く面取りした角柱の形状を呈しています。表面上部に右手人差し指で左手方向を指し示す図柄、その下に「ぜんく王じ道」、右側面には「嘉永二酉年九月吉辰」、と共に陰刻されています。

◆道標は建っていたのか？

正面の「ぜんく王じ道」のうち「・・・じ道」の文字が途中で陰刻を中断しています。また、文字のまわりには二重線が巡っているのがみえますが、これも浅い割付線のみで陰刻されていません。

また、文字を囲む線の下から石柱の下端までが230mmしかなく、これでは自立できないと思われます。

これらの点からこの道標は未成品であり、建てられることはなかったのではないかと推定しています。従って、何らかの原因で本来建てるべき場所に廃棄されたものでないかと考えています。

◆嘉永二年という年

山田昭雄氏のご教示によると見六橋が土橋から石の橋に架け替えられたのは、天明五年（1785）で、その64年後の嘉永二年（1849）十一月にまた新しく石橋に架け替えられたようです。この石橋は、東篠ノ井出身で見六組多七の伯父幸吉（江戸表で成功していた）の寄進によるものであり、長谷の滝之入より石を運んだと文書に記されています。天明五年には見六橋と同時に角間橋も石橋に架け替えられ、この時も石材は滝之入から出した

ようです（『塩崎村史』）。

この道標に刻まれている嘉永二年九月はその二ヶ月前であり、石橋の完成に合わせて、道標を橋のたもとに建てる予定だったのでしょうか。

◆道標の石材

見六橋や角間橋の石橋はもっぱら長谷滝之入から石材を調達していることから、この道標の石材も石橋と同じ場所から切り出したことが考えられます。道標の石材である石英安山岩は長谷付近に産出することがわかっています。

◆雨だれの痕跡

表面に円錐状の穴がいずれもほぼ同じ径、深さで4つ見られます。穴の痕跡からこの道標は、当初水平に置かれ、雨だれによって穴が穿たれたと考えられます。ある時点からは、土がかぶり、雨だれによる穴の進行が止まったと推定されます。

◆道標その後

見六橋架け替え工事が終わるのは4月であり、川底で眠っていたこの道標は橋のたもとで新たな歴史を刻むこととなります。（山口 明）



▲ 善光寺道標正面



▲ 右側面（年号陰刻）

長野市埋蔵文化財センターでは、3月11日(土)～4月9日(日)の約1ヶ月間、博物館特別展示室にて発掘調査速報展を開催しました。平成17年度に発掘調査や整理作業を行った市内13遺跡を取り上げ、出土した土器や写真の展示で調査の成果を紹介しました。

展示した遺跡の時代は、弥生時代から近世まで幅広く、各時代の特徴をよく示しています。水内坐一元神社(みのちましますいちげんじんじゃ)遺跡の調査では古墳時代の土器が列をなして確認されましたが、この出土した状況を接合した土器で復元的に展示しました。また、これまで調査事例が非常に少ない中世も3遺跡展示しました。近年、中世遺跡の調査事例は増えており、中世長野に関する遺跡情報の一端を紹介しました。

さらに飯綱高原の猫又池遺跡より採集された縄文時代の石器や土器の寄贈を受けたため、これらの遺物も合わせて展示・紹介を行いました。

土器の破片に触れるコーナーでは形のわかる土

器を展示して破片から全体をイメージし、手触りの違いを体感してもらう試みをしました。

(風間栄一)



▲ 発掘調査速報展会場

寄贈・寄託資料の紹介

平成17年度も多くの資料の寄贈・寄託をいただきました。厚くお礼申し上げます。(敬称略・順不同)

(寄贈資料)

謄写版	滝沢忠義(三輪)
レジスターほか	渡辺謙一(鶴賀)
唐箕	西沢幸永(川中島町)
獅子頭	黒田初枝(神明)
オルゴール付時計ほか	甘利麗子(箱清水)
千歯扱きほか	小林光昭(青木島)
袋真綿製造機	鳥居一雄(長野)
ナタガマ	春原正毅(御幣川)
櫛ほか	宮沢忠雄(豊野町)
スナイドル銃	共和小学校(小松原)
造花製造道具ほか	桜井幸雄(松代町)
雛人形	永井亨(東福寺)
千歯扱きほか	高原英男(北堀)
万石通しほか	小林敬二(高田)

鬼瓦

お稻荷さん
恵比寿大黒像

(寄託資料)

古文書ほか
祭典用幟旗
和算書
養蚕神社拝殿幕
測量道具ほか
屏風ほか

小島延敏(塩崎)

矢口忠良(杵淵)

倉島久子(松代温泉)

小林敬二(高田)

四ツ屋組祭典係(川中島町)

野池和義(下水鉤)

北河原組(川中島町)

堀内晴美(北長池)

有限会社ぺがさず(長野)



▲ 恵比寿大黒像